

# 人権なら

2020年5月1日

第113号

NPOなら人権情報センター

● ひと・まち・生き生き

## 不安を乗り越えて前に進もう

### コロナ禍でかつて経験したことがない事態に

世界中が今、目に見えないウイルスに振り回されている。腐敗した政治、低迷する経済に加え、この厄介な新型コロナウイルスの感染拡大によって、私たちの日常生活が大きく脅かされている。事態は深刻だ。

私たちの社会はこの3カ月で一変した。自粛要請で日々の活動が制約され、人との関係が大きく断ち切られている。保育、介護など、人との接触を必要とする行動までもが制限される。ふれあい、団らんも消えた。



事態が長引く中で、人々の不安は高まる。不満も高まっている。雇い止めや、倒産などが相次ぎ、失業者が増えている。生活困窮者に経済支援が必要だ。

今回の事態で様々なことが見えてきた。グローバル化が進み、たちまち感染も世界に広がること。日頃の国際協調が大切なこと。危機対応への行政機構が脆弱なこと。医療体制・制度の構築が必須なこと。経済産業構造が歪ではだめなこと。弱者に被害が集中することなど、文明社会が分岐点にあることが分かった。

### 対応の遅れと先が見えないことに高まる不満

感染者が増え続けている。政府は「緊急事態宣言」を出した。だが、マスク2枚の配布など、愚策ばかりで批判が多い。対応も後手後手だ。先手必勝なのに、五輪ファーストで対応を怠った。検査と隔離が必要なのに、検査が少ない。毎日300～400人が亡くなる肺炎患者は「隠れコロナ」ではと危惧される有様だ。

国などはこの間、病院の統廃合を促してきた。保健所は300箇所以上も削減。研究費も削減した。医療行政を軽視したイタリアは被害者が多かった。米国も皆保険制度が無く、医療費が高いため、病院に行けない。結果、患者数が増えた。医療などの公共サービスを縮小すると、安全・安心の社会は築けないのだ。



人々の命や生活と暮らしは今、危機に陥っている。何よりも人命を守ることが優先課題だ。弱者への支援策も必要だ。医療崩壊、経済危機にも備えねばならない。税金の使い道が問われる。米国からの軍用機や武器の爆買いなどは直ちに止めるべきだ。

### 差別、排除の動きに抗して支え合っていこう

人々の不安が高まる今、色んなしわ寄せが脆弱なところにもたらされている。家庭内ではDVや虐待が多発している。ここは、みんなで支え合い、弱者に寄り添いながら乗り越えていかなければいけない。人との豊かな関わりをなくすことをしてはいけない。

なのに、感染者への差別や、感染への恐怖から他人を排斥する卑劣な攻撃が各地で起きている。不安や苛立ちが他人への攻撃に向けられている。医療従事者や、その家族にまで及んでいる。

差別を煽る指導者もいる。財務相は「武漢ウイルス」とヘイト発言する。「国難だから」「国民は丸に」などと真つ当な主張を封殺する動きもある。外出を自粛しない人を「不心得者」として批判の眼を向ける。首長がそれを率先している。権力の強権化、肥大化が心配だ。

私たちには今、この非常事態を乗り越えていくための賢明な思考や行動が求められる。

## 山下力さんから聞き取りを

### 石元清英さんが運動史編纂に向け打ち合わせ

元関西大学教員の石元清英さん(写真)が4月10日、田原本事務所を来訪。山下力さんと聞き取りに向けた打ち合わせを行った。

石元さんは「現在、部落問題をめぐって何が問題なのか」として、①依然として根強い部落問題に対するタブー視 ②市民の共感が得られにくい部落問題③可視化されない部落・部落民④未だに変わることのない解放同盟の部落差別認識などを提起した。



また、山下さんに聞きたいテーマとしては、「糾弾」「部落の生活実態の変化と解放運動」「カムアウトやマイナスイメージの抱え込み」などを挙げた。「部落の現状」としては、都市部落における激しい人口の流動化、安定層の流出と不安定層の流入などを指摘。さらに、消滅していく解放同盟支部、高齢化する同盟員、部落差別に向き合ってこなかった部落の人たち、部落問題を語れない親たちについての自身の考えを述べて、山下さんと意見交換した。

### 「一生懸命勉強して、ムラから出て行け」

山下さんは準備したメモや資料を示し、整理の過程で気づいたことなどを説明。たとえば、「小学校6年生の時に担任教員と父親との話し合いがもたれた」(1954年3月)。その内容は、山下さんが市立青々中学に合格したことで、父親の職業をどのように記載するかの相談だった。結果、父親の仕事は「靴屋」ではなく、「運動具卸商」とする。「ムラ」を隠すため、住所は上但馬ではなく、但馬に。そして、「一生懸命勉強して、ムラから出て行け」ということだった。

山下さんは、この「衝撃的な事件」の背景に、1954年3月7日に磯城郡耳成村(現橿原市)で起きた「硫酸事件」があったと考えている、と語った。

このあと、今後の聞き取り作業は時系列ではなく、

テーマを整理して実施すること。スケジュールもコロナ感染状況を踏まえ、夏以降に設定することとした。

### 上但馬の史跡や施設を見て回る

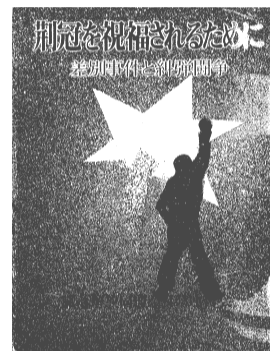
午後は、山下さんが石元さんを上但馬に案内した。途中、「水国闘争の現場」となった田原本町八尾の「鍵の辻」、国粋会の本部が置かれた「鏡作神社」、水平社の本部が置かれた川西町下永の教願寺に足を運んだ。そのあと、三宅町上但馬に向かった。

上但馬では、三郡神社(さんぐん・みごおり)、曾我川(そががわ)の氾濫に備えて造られた五伝請け堤(ごうでんうけづつみ)、1969年解放同盟結成後の住宅要求闘争で実現した上但馬団地と人権センター(旧解放会館)を見て回った。

石元さんには、「奈良の部落解放運動史」の編纂作業にも協力をお願いしている。聞き取り内容も「運動史編纂の基礎資料」に利用することとしている。

### ■硫酸事件とは

大阪の部落出身女性教員が1950年に赴任先の柏原中学校で同僚の男性教員と恋愛。51年には婚約。男性は53年に奈良の田原本中学へ転勤。その間、男性の父親は「身元調査」を元に猛反対。男性は父親の薦めで別の女性と結婚する。だが、それを隠して交際を続けた。女性は事実を知り、死を決意。彼の性器に硫酸をかけた。



奈良県議会は真相調査団を組織。部落解放全国委員会奈良県連と同大阪府連は共同闘争委員会を組織し、差別行政糾弾闘争を展開。1951年の「オールロマンス闘争」(京都)、52年の「西川県議差別事件」(和歌山)、吉和中学校教育差別事件(広島)に続く糾弾闘争として、県下各地で「真相報告集会」が開かれた。「硫酸事件糾弾要綱」は『荆冠を祝福されるために』(県部落解放研究所、1982年発行)に所収。

## 子ども居場所作りを事業展開

### 「ひまわり」が10年前から取り組み続ける

社会福祉法人「ひまわり」は毎年、「子どもの居場所作り事業」を実施している。10年ほど前から続ける。

この事業は、地域の子どもたちと買い物をして、調理し、ご飯を食べる。そのあと、ドッジボールで体を動かし、おやつを食べ、のんびり過ごす、がねらい。「子ども食堂」に似ている。



参加する、しないは子どもたちの自由。参加予約も必要ない。参加費もかからない。初回から欠かさず参加し、毎年の開催を楽しみにしている子どももいる。そうした子どもが友だちを誘って、またやってくる。

10年ほど前には小学生だった子どもたちが「来年、受験やわ」「高校決まってる」「〇〇でアルバイト始めてん」と話し掛けてくれる。立派に成長した姿が見れて、こうした話を聞くと、自分も年を取ったのだ、と感じる。

### 子どもたちが買い物し、調理をして食事する

今年の取り組みは4月3日に実施した。7～17歳までの子ども7人が集まった。うち、1人は初めての参加。いつも参加している子どもが誘ってきた。大人は、ひまわりの6人、なら人権情報センターの1人。例年、参加する三宅小学校の先生は所用で不参加だった。

子どもたちがやって来る時間はバラバラ。いつも来る子どもがなかなか顔を見せない。「迎えに行ってくれない？」と頼む。「ええよ」と、快く応じてくれる。

7人全員が揃ったところで調理をスタート。この日は、アマチュア相撲をしている大人の発案で「奈良相撲連盟流のちゃんこ鍋と炊き込みご飯」を作ることに。だが、「炊き込みご飯が苦手」の子どもがいたため、「土鍋で炊いた白米で塩むすび」作りに変更した。

最初は、「野菜ばっかりやん」「(ミンチに)触りたくない」「作るのめんどくさい」などと騒ぐだけの子どもたち。

でも、気が付けば、「俺の方がうまく野菜切れてるわ」「どうやったらええの」「他に何やればええん」などと、全員が調理や食事の準備作業に取りかかっていた。

土鍋での炊飯を初めて体験する子どもがいた。「こんなん炊けんの？」「すごえ！」とテンションが上がる。ちゃんこ鍋がコトコト煮えてくる。炊き込みご飯と土鍋ご飯から湯気が出始めた。おいしそうな匂いが部屋中を漂う。「めっちゃええ匂いする」「おなかすいた。まだでけへんの」。

### 「同じ釜の飯を食べ、一緒に体を動かす」

食事の用意ができ、一同揃って「いただきます」。熱々の鍋やご飯をふうふう冷ましながら食べる。「めっちゃおいしい！」の音が響く。子どもも大人も、おなかいっぱいになるまで、舌鼓を打つ。食事をしながら、生活のこと、学校のこと、アルバイトのこと、昨年参加した子どもたちの近況など、様々な話で盛り上がる。今回は初めての大人も笑顔になって、子どもたちとの会話を楽しんでいた。



食後、少し休んだあと、みんなでドッジボール。体格や体力差はあるものの、そこは子ども同士が配慮し合う。「〇〇ちゃんにはもっと優しく投げなアカン！」。加わっていない子どもには「こっちのコートに入れるで。おいで」と声を掛ける。1時間以上、ぶっ続けで白熱した戦いを繰り広げる。全員、へトへトになった。

年に1度、「同じ釜の飯を食べ、一緒に体を動かす」という至ってシンプルな活動。肩肘張ったり、難しいことを考える必要もない。年齢や性別、生き方や考え方なども関係ない。すべての参加者がお互いを認め合う。受け入れる。心地良い不思議な時間が流れる。

活動の終わりには、「次は何を作ろう」と子どもたちと相談する。それが「また、来年」の約束となり、未来につながっていく。

(ひまわり相談支援員・来住くみ子)

## 養護学校卒業後の居場所に

### 「なら桜桃会」が田原本に第2作業所を開所

社会福祉法人「なら桜桃会」が4月から、田原本町  
為川北方  
に第2作業  
所(写真)を  
開所した。  
早速、この  
作業所を訪  
れ、海陸力・理事長(写真)に話を伺った。



「なら桜桃会」は、田原本町、三宅町、川西町に居  
住する障害のある子を持つ母親たちが1983年に田  
原本のアパートの一室で始めた活動から生まれた。  
「養護学校を卒業したあとの居場所」を作りたいと思  
いが、今日まで続く活動の源になっている。

2001年には「社会福祉法人」を設立。「母親が中心  
となって創設」したこともあって、「胎内でわが子を包  
み込むような介護ができる」ことをめざす。各種の福祉  
サービスも提供。地域に根付いた取り組みを進める。

第2作業所の道路を挟んだ向かい側には女性のグ  
ループホーム「さくらんぼハウスⅡ」が2016年4月オ

### 編集後記 ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

新型コロナウイルスの感染拡大が各方面に深  
刻な影響を及ぼしている。学校は休校。工場は稼  
働を縮小。飲食などの店舗は営業中止に追い込  
まれている。社会活動も停止を余儀なくされた。  
諸施設が閉鎖され、集会や会合を開く場所もな  
い。話し合う機会がなくなった。この状況が長引く  
と、どうなるのか。不安が募る。いや、たちまち、今  
日、明日をどうするかが心配の切実な人が多い。  
こんなとき、政治が迅速かつ的確に対応し、安心  
策を打ち出すことが必要だ。だが、無策が続く。  
私たちは家族、知人友人、地域とつながり合い、  
支え合って、この危機を乗り切っていくしかない。

ープンしている。また、徒歩で5、6分程のところ  
に民家を購入し、2014年から運営する男性のグ  
ループホーム「さくらんぼハウスⅠ」もある。

### 「人としての優しさと丁寧さが一番大切」

過疎化と高齢化が進む地域にとって、こうした活動  
の場が広がり、地域に根付いていくことは地域の大切  
な資源となる。障害を持つ当  
事者にとっても、職員にとつ  
ても、活動や仕事の場を越えて  
地域の人々と出会え、繋がっ  
ていくことができる意義は大き  
い。旧来の家族や地域の共  
同性を揺さぶりながら、新しい家族や地域のかたちが  
どんどん広がっていくことになれば、とても素晴らしい  
ことだと感じた。



現在、田原本町千代にある第1作業所には16人が、  
第2作業所には14人が通所する。支える職員も増え  
て約30人。海陸理事長は「介護の仕事は多くの技能  
資格よりも、人としての優しさと丁寧さが一番大切」だ  
と語る。苦勞して取り組んできた生き方から発すること  
ばが胸に響いた。

問い合わせ：〒636-0246奈良県磯城郡田原本  
町千代1221-1。電話0744-33-5824。

\*\*\*\*\*

### 学習会「性的マイリティと人権」を延期

NPOなら人権情報センターが3月29日に開催を予  
定していた第2回学習会「性的マイリティと人権」(講  
師:「性と生を考える会」の中田ひとみさん)は、新型コ  
ロナの感染予防のため、延期しました。

### ニュースレター「人権なら」

発行:NPO法人なら人権情報センター

〒636-0223

奈良県磯城郡田原本町鍵301-1

TEL:0744-33-8585/FAX:0744-32-8833

E-mail: info@nponara.or.jp

http://www.nponara.or.jp/